

作物品種名雑考(197)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	坂口, 進
巻/号	33巻12号
掲載ページ	p. 562-568
発行年月	1978年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



作物品種名雑考(7)

—ばれいしょ 2—

坂口 進

ジャガイモかバレイショかということ

ばれいしょの品種名については、浅間さんの広汎かつ詳細な考察が本誌11月号に載せられている。したがって、今さら蛇足を付け加えることも無いのであるが、念のため、このシリーズの表題にある“雑考”という語を広辞苑でひいてみた。そこには、①さまさまの考察、②種々の考証、とあった。それならば、と思ひ直して筆者なりのさまさまな考察を以下に述べることにする。

まず、品種名について語る前に、この作物の呼び名にまつわる問題に触れないわけにはいかない。すなわち、この作物の名を馬鈴薯(バレイショ)とする一派と、ジャガイモとする一派との間の積年の論争のことである。

馬鈴薯派の中には、さらに漢字派、平がな派、片かな派、一部漢字派などという分派があるので、事態は一層ややこしくなっている。

有名なのは、牧野富太郎博士の“じゃがいもハ馬鈴薯デハナイゾヨ”説である。各派各説の論拠についてはここでは触れないことにするが、現在の勢力範囲をみると、農林水産省の中では“ばれいしょ”“馬鈴しょ”または“馬鈴薯”と発音上はバレイショが主流を占めるものの、部局によって平がなと漢字の混ざぐあいがまちまちで、この辺にも論争の根の深さがうかがわれようというものである。文部省関係では、たとえば教科書では“ジャガイモ”とするのが通例である。

農業の分野でも、病理や昆虫関係ではジャガイモ派が主流を占め、たとえばジャガイモXウイルス、ジャガイモガ、ジャガイモシストセンチュウなどと呼び、異端児であったバレイショアブラムシは最近になってチューリップヒゲナガアブラムシと宿がえをして難を避けた。

いささか大げさな表現になるが、いも類の総括検討会議においても、この論争は恒例化した観がある。そしてそこでジャガイモ派の旗がしらをもつて任ずる長崎の知識さんが、愛野馬鈴薯支隊長だというのだから、世の中まことにままならぬものである。

さて、本稿では育種基本計画に記すところに従って“ばれいしょ”でおしとおすことにする。

アイヌ語には縁が深いこと

すでに浅間さんが指摘されたように、育成品種には地

名を付けたものが多い。そのうち北海道のものはアイヌ語に由来している。しばらく、更科源蔵著「アイヌ語地名解」をひもといて、それらのルーツを探ってみよう。

“ニセコ”は、ニセイ・コアン・ヌブリまたはニセイ・コアン・ベツから来ており、峡谷によりかかる山あるいは川であるという。このヌブリ(山)には登、ベツ(川)には別という漢字をあてている地名をよく見かける。

“リシリ”は高い島の意で、隣の札文島が平らなのと対照的に、利尻島には利尻富士がそびえているからという。“エニワ”は、エ・エン・イワで、頭のとがった岩山、“シレットコ”は、シル・エトクで大地の果てである。“ビホロ”は、ペ・ポロ・ベツで水の多い川、“タルマエ”は、タオロ・マイで、川岸の高い所という意だそうである。

“チトセ”は一ひねりした地名で、もとはシコツ(今は支笏湖の名に残っている)と呼び、大きくくぼ地という意であったが、死骨では縁起が悪いということで千歳にしたという。千歳というと鶴を連想するが、事実当時は鶴が多かったそうである。また、同じシコツという地名が函館地方にあったが、そちらの方は亀田としたというから、なかなか凝った話である。

育成地のある場所もアイヌ語に縁が深い。

北海道農業試験場作物第一部畑作物第二研究室のある島松は、シュマ・オ・マップへのあて字で、石のある所という意味だそうである。この研究室では有望系統には島松の一字をとって“島系〇〇号”と命名し、さらに有望なものには“北海〇〇号”を付けている。

道立根釧(コンセン)農業試験場馬鈴しょ科は中標津(ナカシベツ)にある。中標津のシベツは、シ・ベツで川の本流から由来している。根釧は根室(ネムロ)と釧路(クシロ)の頭の一字ずつを取った合成語である。それぞれ、ニ・ムッ・オロ(木のつまる所)と、クッチャロ(沼の水の出口)が、ネムロとクシロになったという。

このように複数の地名を合成すると、どうしても漢字の音読みが一人歩きするようになり、もとの言葉はどこかへ行ってしまふ。北海道各地の、とくに国ぞかいの峠などによく見られる例である。合成語でなくても漢字が一人歩きする好例としては、北海道農試の本拠がある月寒がある。むかしあった国鉄の駅名はツキサップであったが、現在の市街地名はツキサムでとおっており、やが

ていつかゲッカンに変わるのではないかと筆者はひそかに興味を持っている。

いいささか脱線したが、中標津では有望系統に、“根系〇〇号”および“根育〇〇号”と命名している。

なお、長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場では“長系〇〇号”および“西海〇〇号”となる。

ここで出てきた“北海〇〇号”とまぎらわしく、誤解をまねく品種に俗称“北海1号”というのがあった。これは戦後“ケネベック”や“ホイラ”が導入された時代に入ってきた“529-8”が一部農家で栽培されたもので、正式の北海シリーズとは関係はない。

男爵いもと五月皇后のこと

一般消費者の間で、食用ばれいしょとして名が通っているものは“男爵いも”と“マークイン”であろう。

前者の原品種名“*Irish Cobbler*”は、すなわちアイルランドの靴屋あるいは革細工師で、ばれいしょの名としてはいいささか奇異な感じがするが、このいもを始めて栽培していた人にちなむとされている。

アイルランドからアメリカに渡った一家からは、後年になって大統領（ジョン・F・ケネディー）が出たし、日本へ渡った方は男爵に出世していた、という小話を披露して下さったのは、他ならぬ“ばれいしょ農林1号”の生みの親の田口さんである。

この“農林1号”は“男爵いも”を母親に持つ大物品種で、まだ源氏名のない時代に生まれたので、農家では“ノウイチ”で通っている。ついでながら、店頭に並ぶ姿からは“男爵いも”と区別し難いところから、街でノウイチ氏が華族席にまぎれこんだとしても、まず見破られることはない。戦前のわが国にあった世襲の華族制度によれば、上の方から、公・侯・伯・子・男の5階級の爵位があった。

4年前、“ワセシロ”の審議の折に育成地から出されていた候補名“ハクシャク”は、つまり伯爵だから男爵よりも偉いわけである。その席では、いまさら爵位をくれる必要もあるまい。それに男爵と伯爵とどちらが偉いか、今の人にはピンと来ないだろう。とひとしきり華族復権の是非論がたたかわされたことを覚えている。

一方、“マークイン”は原品種名がそのまま生かされている。最近、台湾へ技術指導に行ってこられた元北海道中央馬鈴薯原原種農場長の塩田さんは、彼地の畑で男爵と並んだ“五月皇后”に会見してこられたそうである。“五月皇后”とは、漢字の国に住みついた“マークイン”のことである。

外国の品種にも地名が多いこと

欧米のばれいしょ品種名は、さすがに本場だけのことはあって多彩である。さいわい北海道農試の西部さんからいただいた資料の中に多くの品種名が載っているので、11月号の浅間さんのお話となるべく重複しないように引用してみたい。有力な資料は、隔年にオランダの畑作物品種試験場（IVRO）から発行される世界中のばれいしょ品種のカタログである。

まず気が付くことは、“エニワ・デジマ”式の地名そのものというのが結構あるということである。

“*Green Mountain*”はわが国でも栽培されたことのある品種である。文字通り訳せば緑の山となるが、アメリカのバーモント州にある山で、独立戦争当時、同州の市民兵の呼称にもなったというから、恐らく同地方のシンボルなのであろう。

“*Essex*”（英国の州），“*Plymouth*”（英国の町），“*Superior・Ontario*”（どちらも五大湖名）などから、“*Norland*”（北国またはスカンジナビア）というような広域地名もある。このうち“*Plymouth*”はかのメイフラワー号が船出したゆかりの港であるから、単なる一地名をこえた象徴的なひびきを持つのであろう。

アメリカでは川の名もよく使われている。たとえば、“*Kennebec*”（メイン州の川）をはじめ、“*Merrimack・Mohawk*”などから、桜でおなじみの“*Potomac*”もある。いずれも、川と書くより河の方がふさわしいような大河である。山には“*Katahdin*”などがある。

ヨーロッパの方でも“*Krasnefumusk*”（ロシア地名），“*Brasovean*”（ルーマニア地名），“*Pommernbote*”（ドイツ地名），“*Parnassia*”（ギリシア地名）などの地名が目につくが、中に地名そのものでなく語尾の一部が変化しているものがある。

地名+名詞という形からは、“ホッカイアカ”式に似てはいるが、もっと意識的に育成地にちなんで一連シリーズとしたものが、英国にいくつかある。

スコットランドのペントランドフィールドからは、“*Pentland Ace・Pentland Beauty・Pentland Crown*”など一連の品種が出ており、“*Craigs Bounty・Craigs Royal・Craigs Snow-White*”というのも同所から出ている。同じスコットランドには“*Arran Banner・Arran Pilot・Arran Victory*”などの一族を育成している所もあるし、北アイルランドの“*Ulster Knight・Ulster Leader・Ulster Monarch・Ulster Prince*”なども同じ趣向である。

こうした命名方式には何となく商売臭さを感じるが、

事実、品種特許や名称登録の権利と関係があるのかも知れない。

いもの外観と早生がうたい文句になること

“ワセシロ・トヨシロ”式のように、品種の特性を表現したものには、“Doré・Golden”(どちらも黄金色)、“Long White”(長白)といったものの肉色を示したもののほか、いもの皮色は大きな特徴なので、赤皮の“Red-skin”とそのものずばりから、“Red Beauty・Red King・Red La Soda・Red Pontiac”など Red を冠したものがあつた。このうち“Red King”は“King Edward VII”(エドワード七世、日英同盟当時の英国王)という品種から、枝変わりが出てきた赤い王様である。

いもの表皮に細かいひび割れが網目のように現われる特性があり、これをネットまたはラセットと呼ぶ。このことを知らないで“Netted Gem”(網目のある宝石)という名を見ただけでは、どんな宝石かと首をかしげるに違いない。この品種はまたの名を“Russet Burbank”あるいは“Idaho Russet”と呼ぶアメリカにおける大品種である。育種家バーバンクも、アイダホ州も、ともにばれいしょには縁が深い。

早生という意味を冠した品種名はかなり多い。早熟性の重要さを反映しているといつてよい。わが国にもつくられた“Early Rose”をはじめ“Early Gem”(早生+宝石)、“Early Norther”(早生+北風)、“Early Ohio”(早生+オハイオ州)などがあり、ドイツの“Frühmölle”も前半は早生の意である。ロシアではこれが“〇〇 Rannij”となる。“Earliest of All”となると、これより早いもの出番がなくなるが、余程の自信作でもあつたらうか。

でん粉含有率が高いことを率直に示すこと

“Hochprozentige”(高パーセント)はリアル感あふれた命名である。この品種はわが国でも育種素材としてよく使われ、ブリーダー仲間では“ホッホ”で通用している。

でん粉といえば、“Sommerstärke”(夏のでん粉)、“Stärkereiche”(でん粉に富む)というもある。豊産性や総合的な優秀性を表現したと思われるものには、抽象的な言葉も使われて多彩である。最高とか第一級とかいう意味をもつものとして、“Alpha・Climax・Eersteling・Prima”などがあり、さきあげた“Pentland Ace”の Ace もそうである。“Désirée”(望ましい)、“Ideal”(理想の)、“Prominent”(目立つ)、“Record”(記録的)というようなものもこの延長線上にある名

前といえよう。

草木鳥獣の名もあること

動植物名は比較的少ないが、いくつか例をあげてみよう。昔、わが国にもつくられた“Pepo”はウリの一種にちなむ。“Clivia”(クンシラン)、“Datura”(ナス科の一属)、“Deodara”(樹木の名)、“Pimpernel”(ルリハコベ)、“Viola”(スミレ)などが植物名で、どれもドイツの品種である。“Sieglinde”(勝利のポダイジュ)もこの仲間に入ろうか。

一方、アメリカには“Sequoia”(世界爺)があり、英国には“Shamrock”(ツメクサ)がある。

“Lerche”(ヒバリ)、“Schwalbe”(ツバメ)、“Zeisig”(ヒワ)はいずれもドイツ語の鳥である。

強そうなどころでは“Panther”(ヒョウ)がいるが、この親をたどってみたら、野生種×“Tiger”であつた。まさに虎の子である。

宝石など鉱物とばれいしょとは結びつき難いようで、さきあげた“Netted Gem”などもあるが、余り多くはない。“Kohinoor”という品種があるが、これはひょっとすると、ビクトリア女王がインドから手に入れた109カラットの大ダイヤ Kohinoor にあやかつたものかも知れない。

外国の品種は人間くさいこと

さて、ばれいしょに限らず、わが国ではなじみがないが、外国の品種でよく見かけるのが人名である。それは、特定の人名であることもあるし、一般に使われる人名もあり、“男爵いも・マークイン”式の階級や職業にちなんだものもある。

余談になるが、筆者の少年時代は軍国色に覆われた時代であつたから、各国の軍艦や飛行機の型や名をたくさん知っている仲間うちで幅がきいた。今その一端を披露すると、まず日本の主力艦は、陸奥・日向などの地名(くわしくいえば、戦艦は国名、巡洋戦艦は山名で、それももと官軍だつた西日本が多い)、アメリカの主力艦は、アリゾナ・ネバダなど州名であつたから、この点では日米間に共通点があつた。ところが英国のものは、ネルソン・ロドネイ・プリンスオブウェールズなど人名が多い。ドイツ・イタリアやフランスの例をみても人名が多かつた。もつともドイツにはドイッチェラントという有名な小型戦艦があつたが、大戦が始まるとすぐリュッツォと提督の名に変わった。ドイツそのものの名をつけたまま沈没でもしたら、一大事と考えたのに相違ない。

とに角、こんなことから、日本では個人名を公共物に

つける習慣はないのに、国によってはいろいろと違うものだ、と子供心にも感じたことを思い出す。

アメリカでも、戦後の空母や原潜には人名が使われており、この面ではヨーロッパ同様になったようだが、わが国では個人名を大っぴらに使うことには抵抗感が大きいようだ。作物品種名にあらわに人名が登場することは、まず当分は考えられそうにない。

さて、話をばれいしよに戻すと、パーバンクやエドワード七世王はすでに紹介したが、“Queen Mary・Hindenburg・Gladstone・Charles Downing”のほか、学者の“Prof. Wohltmann・Kameraz”，詩人の“Puskina・Tasso”といったところから、トルストイの小説の主人公でありナツメロでもおなじみの“Katjusa”（カチューシャ）もいる。

このような特定人物でなく一般的な人名として、女性名が好んで命名されていることは、浅間さんも指摘されているとおりでである。

さらに人の職業というか、階級というか、いわば“男爵いも”式のものとして、王様や女王様はすでに登場したが、“Kardinal”（枢機卿），“Earlaine”（伯爵）がいる。

この“Earlaine”の前半は早生にひっかけているようにも思われる。“Chieftain”（指揮者），“Matador”（闘牛士），“Amigo”（友人）もいる。一風変わった所では“Rural New Yorker”（いなか風のニューヨーク子、あるいはいなか紳士といった所か）もひかえている。

アメリカでは、インディアンなどの部族名が愛用されていることはご存知のとおりである。

神話や伝説への登場人物も品種名になっているが、この種のもは天体の名にもなっている場合があり、命名者がどちらを考えてとったものかは判断し難い。“Luna”（月の女神），“Orion”（オリオン星、狩の神）などのほか、“Pollax”と“Kastor”の双子神または双子星が、仲良くばれいしよになっている。

多様性に感じ入ること

さて、まだまだ今までの分類におさまりにくいものがある。“Ackersegen”（畑のめぐみ），“Bodenkraft”（土の力），“Erdmanna”（大地から恵まれた食物）などは、いかにも地中から掘り取る作物にふさわしい。“Furore”（情熱），“Hansa”（都市同盟），“Start”（出発），“Bliss”（天上の楽園）などとなると、命名の発想もさまざまであるとしか言いようがない。

もともと、ばれいしよの品種はインターナショナルな性格が強く、とくにヨーロッパでは国境を越えて流通し

ている品種が多い。したがって、われわれには、もとの国籍を見定めることが容易でなく、品種命名のお国ぶりを論じようとしても、意外にむづかしい。また、ここでは南米をはじめとして触れることの少なかった国々もある。

しかし大まかに言えば、北米では地名がよく使われ、ヨーロッパでは人名ははじめ多様性に富む、という傾向はたしかである。この背景として、民間育種が盛んなヨーロッパ諸国では、命名方式にもいきおい画一性が乏しくなる、ということが言えそうである。

わが国の場合でも、在来品種の名はさまざまな発想から名付けられていることは、ばれいしよに限らない。しかし、しばしば在来種を収集して整理すると、“四国在来1号・長崎在来2”などと味もそっけもなくなってしまふ例がある。これを指して、名を捨てて実をとってきた、という駄洒落になってしまうが、意味不明の名でも付いていたならば、大事にしておきたいものである。

ばれいしよの品種保存のリストを眺めると、“オフクロン”というのがあったが、ひょっとするとこれは off clone つまり変り物ということではなからうか。そうだとしたら由来が気になる代物である。“武佐”（ムサ）というのは道東の標津川の一支流の名に関係がありそうであるが、実際にその辺の土地を調べたわけではないから確言できない。

これからの品種名について考えること

わが国のばれいしよ育成品種には、地名そのものを付けたものが60%ある。この背景として、育成地が、現在は北海道に2カ所と九州に1カ所あり、どちらも国立公園など観光名所をひかえており、手頃な地名には事欠かなかったことがあげられよう。そして、地名は生産農家に親しまれるように、また銘柄としても通用しやすいように、普及見込地帯から選ばれる事情は他作物と同様である。

ところが困ったことに、最近では語感の良い地名があらかた売り切れてしまった。一方、地名そのものを付けることによって、特定産地を強調し過ぎることになり、広域普及を妨げるおそれがある、という意見にも耳を傾けねばなるまい。

その点では、“ホッカイアカ・ニシユタカ”式の、広域地名＋形容名詞ならば、まだ発展の余地がありそうである。しかし、ここで心配なことは、ばれいしよの産地分布から見て、どうしても、ホッカイ〇〇・キタ〇〇・ニシ〇〇あたりに集中してしまい、しかもこの後に付けるものが、シロ・アカ・ワセ・ユタカとなれば、おのず

から先が見えてくる。

地域性を排したものに“オオジロ・ユキジロ・ワセシロ・トヨシロ”があり、“紅丸”もこの部類に入る。これも、片かな2~3字を入れ替える限りでは大して将来性はない。

つまり、短くて良い名前が払底してくることは間違いない。それに加えて、案外厄介なのは自他の作物で、既に使われている名前と重複してはならない、という約束事である。これについて筆者もあわてた経験があり、三つほど提出した候補名が、すべて使用済で却下されたことがある。

対策として第一に考えられることは、重複を避けねばならない作物の範囲を明確に限定することである。たとえば、果樹品種にすでに使われているから、いにも駄目だ、という必要はないように思われる。それと同時に、ブリーダーの手もとで、関係する範囲の作物品種名を、在来品種も含めて容易に検索・照合できるような便をはかる必要がある。

第二に、横綱や役者のように襲名制度を活用してはどうだろうか。名を継ぐに値するかどうか、先代の名を恥ずかしめないかどうか、が思案のしどころとなる。それだけに、またかつての大物品種を継ぐ自信作も出てこよう、というものである。この案の欠点は、作物品種はいつまでも保存されるから、同名異物があつては困るということである。したがって、オリジナルな名の後に“2”と数字を付けることにする。2号という系統番号とまぎらわしいから、数字だけにしたのだが、あるい

は2世または2代と呼ぶことにしても良い。つまり“ユキジロ2”あるいは“シレットコ2世(または代)”という具合になる。時計文字で“II”とすれば王様のようなのである。

余談になるが、相撲界で谷風などいくつかのしこ名は、実力・貫録ともにイメージが強烈すぎて襲名しないのだそうである。長島の背番号3が永久欠番になっているようなものである。

第三に、競馬のハイセーコー式に、和洋混用をもっと活用することである。作物によっては、たとえばドリルムギや、ピリカスイート(これはアイヌ語と英語)の例が既にある。さらに完全に洋風化した例として、ニューゴールデンや、サンライズもあり、これはいわばテンポイント式に属する。しかし、一般的にはバタ臭い品種名は敬遠されているのではなからうか。

筆者もかつてポテトチップ用品種に、スノーチップあるいはスワンチップなど考えたことがあったが、国籍不明ということと、同名のものが外国にあるかも知れぬ、というためらいがあった。和洋混用ならば、そのような心配はないわけである。ただ、字数が余り長くなるようでは困る。

さて、いずれにしても、名前より中身が大切なのだ、ということまぎれもなく正論である。しかし、今の世の中、ネーミングを軽んずるわけには参らない。そして、名が実をあらわし、名実相ともなうこととなれば万々歳である。(さかぐちすむ 農業技術研究所生理遺伝部 遺伝第3研究室長)

●作物品種名の混乱を防ぐには●

本誌の連載記事「作物品種名雑考」の②(水稻)(33巻第3号134~139)の中で、櫛淵欽也氏は、中国での体験として、品種名の表記方法と読み方について、困惑した体験を記されている。

最近、育種材料についての国際的交換が盛んになっている折から、品種名の表記に十分留意しないと、同名異品種あるいは異名同品種などの混乱を招きかねない。ひとつの例をあげると、水稻の1品種に「白米粉」というのがあり、IRRI(国際イネ研究所)のカタログでは、北京語で Bai Meh Fan となっている。一方、この品種は古くから Pe Bi Fun(広東語か?)として流布しているとのことである(農技研・遺伝科 川上・中根両氏による)。また、中国から昨年導入されたトウモロコシ・ラッカセイ・ダイズの種子リストの場合、新しい中国文字で品種名が記されていた。たとえば「折44号」,「荻白」という品種名があるが、これらはわが国字の「護4号」,「獲白」である。このように、中国文字と日

本国字とのちがいは、同系列の文字であるため、かえって混乱を生じやすいのではないか?

ここに挙げた例は最近のものだが、諸外国との育種材料の交流には、これに類することは多いはずである。アラビア文字、ロシア文字なども、その中に入るだろう。ロシア文字については、有難いことに BNP(=VIR)(全ソ栽培植物研究所)が、ローマ字化した品種名で品種リストを送ってくれる。つまり、品種名は固有名詞であるから、その名前がついた場所での読み方をローマ字化して、これによって処理することにしているかと思う。したがって、わが国の品種は、国外では Koshi hikari(コシヒカリ), Reimei(レイメイ)などとし、中国で櫛淵氏が経験したように、「越光」「黎明」ではないことを明らかにしておくことが必要である。もちろんお隣りの「統一」は Touitsu でなく Tong II としなければならない。こうして、育種材料の正しい名前が確保されよう。さらに、各国の文字が理解の助けとなると判断される場合は、備考欄にその文字を記入して、補足すればよいと思う。(案山子)